

こまきこども未来館講座運営評価シート

あそび	【評価点について】						
	S	評価のポイントを意識し取り組み、また改善・発展させ、大きな成果が出ている。					
	A	評価のポイントを意識し取り組み、また改善・発展させている。					
	B	評価のポイントを意識し取り組んでいるが、さらなる発展を期待する。					
	C	評価のポイントを意識し取り組んでいるが、取り組みを評価できる状況まで至っていない。					
D	評価のポイントの一部又は全てに取り組みていない。						
まなび	利用対象児童(0歳～18歳)が日常的に気軽に利用できる環境づくり			自己評価点	S	講座運営会議評価	S
	【評価のポイント】			【評価点の理由】			【評価に対するコメント】
	・児童館は0歳～18歳までのすべての児童が自らの意思でひとりでも利用することができる環境づくりが大切。			ワークスペース1において、日常から来館することが居場所とできるようになってきている。理由として、自由工作エリアと意図的に離れたことで、市外の方を中心とした、未来館を単発的に利用する方は少し離れた環境を基地のように利用して「昨日の続きをする」ことが以前より容易になったのではないかと。平日の午前中は、乳幼児親子も楽しめる講座や、サポーターの方に作っていただいた玩具などで乳幼児親子の居場所づくりも進んでいる。			空間の工夫により継続的に利用しやすい環境が整えられ、日常的な利用を促す基盤となっている点が評価できる。また、令和7年度に実施した市外来館者アンケートでも約3割が初来館と回答していることから、初めての利用者や単発的な利用者にも開かれた環境となっており、気軽に利用しやすい状況が整えられているといえる。さらに、中高生向け講座の充実を通じて新たな利用のきっかけづくりも図られており、幅広い年代の利用につながっていた。
	・すべての児童が気兼ねなく、いつでも、何度でも気軽に利用できる環境となっているか。						
	・すべての年齢層が十分に利用できているか。						
まなび	活動を通じた発達の増進			自己評価点	S	講座運営会議評価	S
	【評価のポイント】			【評価点の理由】			【評価に対するコメント】
	・児童館は、児童と長期的・継続的に関わり、遊びや創作活動などを通じて、児童の発達の増進を図ることが大切。			ワークスペースの継続利用が増えたことにより、「こども商店」が生まれた。小規模ではじまった「こども商店」が、人を呼び、次のこども商店へ、日々の継続がワークスペースを賑わわせている。また、プログラミングラボ1でタブレット利用をすることで、マイクラを遊ぶ子が増えている。その中から、毎週末こどもたちが開催するマイクラ部へと活動の幅が広がっている。			特に、「こども商店」や「マイクラ部」といった活動が、こどもの発意により展開され、さらにその様子を見た他のこどもが新たに加わるなど、創意工夫が繰り返されながら活動の幅が広がっていた点が評価できる。また、思春期の児童も含め多様な活動機会が提供されたことで、仲間関係や大人との関係形成にもつながっていた。運動遊びの実施を含め、講座の開催におけるこどもの発達段階に応じた配慮がなされていた。
	・児童の発達の特徴や発達過程を理解し、個人差を踏まえて知識や技術の習得に向けた身体活動や創作活動ができているか。			思春期のこどもたちに対しては、2F交流ひろばを中心に、ビリヤード、音楽・デジタル系の活動など、友人と過ごしなが参加できる遊びや体験を継続し、仲間との関係づくり、信頼できる大人とのゆるやかな関係形成につながっている。			
	(参考) 乳幼児期: 大人との信頼関係を基にして児童同士の関係をもてるようになっていく 児童期: 多様で創意工夫が加わった遊びを想像できるようにしているか 思春期: 自分と仲間に対して信頼と安心を抱けているか			利用者アンケートで希望の多かった運動遊びについて、乳幼児親子向け、小中学生向けと講座として開催し、年齢や発達段階に応じた身体活動の機会を提供することができた。			
まなび	児童が主体的かつ創造的に活動できる環境づくり			自己評価点	S	講座運営会議評価	S
	【評価のポイント】			【評価点の理由】			【評価に対するコメント】
	・児童館は決まった遊びを児童に与えるだけでなく、主体的かつ創造的に活動できることが大切。			「自由工作」エリアでは、企業や保護者から提供いただいた材料をもとに、テーマや内容を自ら考え、日々創作活動を行っている。こどもたちは、作ったものをすぐそばにあるキッズカーで販売することを提案し、自ら館内放送で宣伝を行うなど遊びの幅を広げている。また、こども参画イベント「こまき冒険スライム村」は、R7年度で3年目の開催となった。開催期間を昨年度の10日間から17日間に拡大し、実行委員は約90人、当日参加者は1,900人を超える規模となった。実行委員のこどもたちは、企画・準備・運営に主体的に関わるだけでなく、次回の実行委員を増やすための新たな施策を考えるなど、活動の継続性についても視野に入れている。主体的な関わりを自分たちだけにとどめず、他のこどもたちにも広げていこうとする姿が見られた。さらに、中高生においては、「未来館で充電したい」という声とこどもが行った署名活動をきっかけに、市職員と連携して「こども会議」を全4回実施。単にこどもたちの要望を受け入れるのではなく、公共施設として税金を使うことの意味や意義についてこどもたちが考える機会にもなった。			「こども会議」においては、市の児童厚生員と協力して中高生の意見を聴取することとまらず、オープンな議論を経て大人に提案する仕組みを構築し、行政側もその提案を尊重するという流れが確立したと認められる。「スライム村」の取組とも合わせ、「自分の意見も、伝えれば何か変わるかもしれない」という意識がこどもたちの中に芽生え、仲間を集めて自らの考えを整理し、関係者や大人に伝えようとする主体的な動きが見られるようになってきている点が評価できる。
	・児童が、自由な発想で工夫して創造できる環境となっているか。						
	・児童の自主性や主体性を育む企画となっているか。						
まなび	学びを振り返り成長を実感できる環境づくり			自己評価点	B	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】			【評価点の理由】			【評価に対するコメント】
	・主体的に活動を進めるには、これまでの学びを振り返り、自分を客観視し、次の学びへ繋げる連続性が大切。			連続的な講座や探究学習、プロジェクト、こども自身が企画した講座・イベントについては、実施前や実施中に仮説を立て、実施後にはアンケートや対話の場を通じてふりかえりを行っている。一方で、職員によるふりかえりの支援や、こどもへの伴走支援については、現時点では職員個人の経験や力量に依存する部分も大きい。			講座やイベント等の機会においては、自身のたてた仮説や、その振り返りを通じて次の学びに繋げる取組が着実に進められている点が評価できる。日常的な振り返りや学びの整理については、運営体制の中で一定の難しさもあると考えられるが、引き続き職員間での方針の共有や対応の統一を進めるとともに、学びを振り返り、成長を実感できる環境づくりの充実が図られることを期待する。
	・目的や方法を自ら考えることができる力を育てる環境となっているか。また、働きかけができているか。			今後は、より安定的にこどもの学びの振り返りを支援できる仕組みを整えたい。			
	・これまでの自分の活動を振り返ることができる仕組みや環境を設けているか。						
交流	利用者同士の関係を豊かにする交流環境づくり			自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】			【評価点の理由】			【評価に対するコメント】
	・児童館は幅広い年齢の児童が出会い、交流できる場であることが大切。			講座やイベントの設計において、小学生から中学生までが参加できる内容を意識し、異年齢のこどもたちが同じ場で活動できる機会を継続的に設けた。年齢や経験に差があっても一緒に取り組めるよう、活動内容や進行方法を工夫するとともに、職員の配置や声かけによって、年上のこどもが年下のこどもを助けたり、年下のこどもが年上の姿を見て挑戦したりする関係が生まれるようにした。また、マイクラ部では、継続的に参加するこどもたちがゲームに沿って制作を行い、通常来館のこどもたちも一緒に参加できる活動として展開した。共通の遊びや関心をきっかけに、学年や学校の違うこども同士が自然に関わる機会となっている。			講座等において、年齢や経験の異なるこどもが関わる機会が意図的に設けられており、実際に異年齢のこども同士が交流しながら活動する様子が確認できた点が評価できる。また、こうした関わりの中で、年上が年下を支えたり、年下が年上の姿から刺激を受けるなど、相互に影響し合う関係性が生まれている点も認められる。共通の関心を起点に学年や学校、地域を越えた交流が広がっており、児童同士の関係を豊かにする環境づくりに進められているものといえる。
	・講座や活動において、異年齢児童と一緒に交流しあって取り組める工夫がされているか。			参加者は小牧市内の小中学校に限らず、市外からの来館者も含まれており、普段の学校生活では出会いにくいこども同士が関わる機会にもなっている。講座やイベントを通じて、学年や学校、地域を超えて一緒に遊び、考え、活動する経験が生まれ、利用者同士の関係を豊かにする交流環境づくりに繋がった。			
交流	障がいの有無や国籍の違いを越えて児童がお互いの理解を深める取り組み				B	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】			【評価点の理由】			【評価に対するコメント】
	・すべての児童を対象とする活動を行う児童館では、様々な児童がお互いに理解を深められる工夫が大切。			放課後デイサービスからの団体利用を含めて、障がいの有無にかかわらず、こども同士が同じ場で遊びや活動を通じて関わる機会を継続して設けた。「こども商店」では特別支援学級に所属する児童と通常学級の児童が和気あいあいと語り合い、協力して製作や販売を行う様子が印象的だった。			こども同士が同じ場で関わる環境が日常的に形成されており、こどもの特性や背景によらず自然に受け入れられている状況がつけられている点は、相互理解の基盤として有効に機能しているものと評価できる。「ハロウィンCAMP」等の取組においても年々規模が拡大するとともに、文化の違いを学び、楽しむ機会として発展しており、多様性への理解を深める環境づくりに繋がっているものと認められる。
	・障害の有無や、国籍の違いを越えて思いやりを育み、学びあいができる働きかけや工夫ができているか。			また、毎年の恒例行事となっている「ハロウィンCAMP」や「クリスマスCAMP」では、外国にルーツをもつサポーター、地域団体、企業、中高生ボランティアなどが参加・交流した。季節行事をきっかけに、国籍や文化、年齢の違いを越えて、こどもたちが一緒に遊び、体験し、関わる場として定着してきている。			

こども	様々な遊びや体験を通して楽しみながらそれぞれの学びを見つけ、未来リテラシーを育む取り組み	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・目標達成にむけて年度毎に設定された計画を達成できた。 ※目標：実施計画における中長期的のVisionを指す	【評価点の理由】 令和7年度は、3ヵ年ロードマップのPhase2として、「小さな挑戦の連続」「こども参画からこども運営へ」を意識し、こどもの声を受け止め、反映し、次の挑戦につなげる取り組みを進めた。 2F交流ひろば中高生利用促進プロジェクトでは、市職の児童厚生員とのPTでこどもの声を共有・検討し、Wi-Fi利用、交流ひろばの拡張、レイアウト変更など、意見を具体的な環境改善へ反映した。また、検討状況や実現できた内容をこどもたちに返すことで、こどもの声・意見へのフィードバック、評価、反映の流れを強化し、こども会議やルールづくりなど、こどもたちが未来館の使い方や過ごし方について考え、関わろうとする動きも生まれてきている。 職員・組織体制の面では、こども家庭庁が進めるこども意見ファシリテーターの取り組みに参加し、こどもの声を聴き、受け止め、反映する視点や技術の向上に努めた。また、児童厚生員＋3名（目標＋2）、社会教育士＋1名の目標を達成し、児童館としての専門性に加え、学校・地域・企業・行政等をつなぎ、協働を生み出す体制の強化につながった。	【評価に対するコメント】 こどもが意見を述べる環境を整備し、内容をフィードバック、運営に反映させるサイクルが機能している。講座の開催についても、体験機会の提供にとどまらず、こどもが安心して活動に参加できる環境が整えられており、様々なことに挑戦できる基盤として機能している。そのもとで、こども自身が施設の使い方やルールづくりに関わろうとする動きも見られ、小さな挑戦へとつながる環境が形成されている。さらに、職員の関わりの方の質の向上や体制整備も進められており、遊びと学び、個人と社会をつなぐ取組として、中長期Visionの実現に向けた展開が具体的な形として現れていることを評価する。		
保護者	保護者にとっても楽しく過ごしやすい環境づくり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・保護者同伴で来館する幼児親子などにとっては、一緒に体験する保護者も過ごしやすいことが大切。 ・児童だけでなく、保護者も一緒に楽しむ工夫や、くつろげるよう取り組みがされているか。	【評価点の理由】 専門講師ワークショップ「みんなでJUMP・JAM PARK」など、こどもの可能性を引き出す運動遊び講座では、こどもだけではなく保護者も一緒に全力で楽しむ姿が見られた。また、にこぼけキッズ講師による「運動遊び・感触遊び」では、2歳以上の親子を対象に、色々な運動や寒天を使った感触遊びをおこなった。こどもだけではなく大人も集中して楽しむ様子が随所に見られた。自由工作エリアでは、やや難易度の高い作業や工具の取り扱いをこどもに示しながら、自らも夢中になって作業する保護者の微笑ましい姿もあった。 さらにHello, Worldでは、親子で新しい技術やモノづくりに触れる機会を継続して設けている。こどもが楽しむだけでなく、保護者にとってもこどもの関心や新しい学びに触れ、一緒に過ごしやすい環境づくりにつなげた。	【評価に対するコメント】 保護者がこどもとともに工作や講座に参加し、一緒に楽しむ場面が多く見られるなど、親子で過ごしやすい環境がつくられていた点が評価できる。また、読み聞かせの開催方法を見直し、市の児童厚生員と連携して実施するなど、より親子で楽しめるよう工夫されていた。保護者にとっても安心して関わりながら過ごせる環境づくりが進められているといえる。		
	保護者同士の交流環境づくり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・児童館における保護者同士の交流は、子育ての悩みや喜びを分かち合う大切な機会である。 ・活動への参加だけでなく、保護者同士が交流する機会となるよう意識した運営となっているか。	【評価点の理由】 乳幼児向け職員講座「オラ！クラフト」や「かんたん工作」では、親子で参加した家族同士を活動の中でつないでいく働きかけを職員が積極的におこなっている。この活動を楽しむにしている継続的に参加される保護者も多く、お互い顔見知りとなって会話に花を咲かせる様子も見られるようになってきた。今後も乳幼児の保護者を中心に、互いに子育ての悩みや成長の喜びなどを分かち合えるような関係構築に向けて、声掛けなどをおこなってきたい。 こどもAgoraでは、親子で参加する中で、自分のこどもだけでなく他のこどもの考えや表現に触れる機会となり、保護者同士もこどもたちの姿を見守りながら交流する場面が生まれた。活動への参加を通じて、保護者がこどもの育ちと一緒に感じ、他の家庭のこどもとの関わりを持てる交流環境づくりにつなげた。	【評価に対するコメント】 活動の中で職員が家族同士をつなぐよう意識的に働きかけていることは、家族同士の関係づくりを支援する機能を発揮している点として評価できる。活動を通して、保護者同士が関わる機会が生まれ、こどもの活動を介した交流が促進されていることが確認できる。こどもの育ちを共有しながら自然に会話が生まれ、日常的な交流へとつながっていることから、保護者同士が子育てに関する思いや気づきを分かち合える関係づくりが進められているといえる。		
運営	地域との積極的な連携および地域住民が関わりやすい環境づくり	自己評価点	S	講座運営会議評価	S
	【評価のポイント】 ・地域ぐるみで一緒により良い児童館を創り上げていくために、地域の団体や企業、住民との良好な連携が大切。 ・地域の団体や企業、住民に積極的に協力や連携を働きかけているか。また、様々な形で連携を行っているか。 ・団体、企業などのグループだけでなく、地域住民や保護者などが個人でも関わりやすい環境となっているか。	【評価点の理由】 サポーター登録者数は200人から211人、サポーター企業は128から142団体へ増加しており、地域の団体・企業・住民との連携が広がっている。 定期的に来館しているサポーターとは、日常の関わりの中で関係を築き、それぞれの強みを活かした交流・体験CAMPや講座の実施につなげることができた。また、サポーター同士を交流CAMP等で案内・紹介するなど、サポーター間の関係づくりにも取り組んだ。 さらに、サポーターや利用者から工作用の資材提供を受ける機会も増えており、保護者や地域住民が個人としても関わりやすい環境づくりにつながった。加えて、ホームページを通して、外国人や地元企業、大手企業からサポーター希望の問い合わせも来ており、活動の認知度も高まっている。	【評価に対するコメント】 サポーターや企業等との関係が継続的に構築される中で、それぞれの強みを活かした講座等へ結びつけ、具体的な取組として展開されている点が評価できる。活動の場を館内にとどめず地元企業の工場等へ広げる取組も見られ、地域資源を活かした体験機会の創出につながっている。また、サポーター同士のつながりづくりや資材提供を通じて個人として関わる機会も生まれており、関係性の広がりとともに、地域住民や企業が関わりやすい環境づくりが進められているといえる。		
	利用促進につながる効果的な広報活動	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・運営への理解を広め、ここでしかできない活動の魅力の周知は、活動への参加を促すために大切な活動である。 ・効果的な広報活動ができているか。施設周辺地域だけでなく、市域全城（及び市外）に広く広報できているか。	【評価点の理由】 令和7年4月より未来館公式LINEの運用を開始し、令和8年3月末時点で友だち登録数は842人となった。講座やイベント情報をSNSやホームページだけでなく、LINEを通じて直接届けすることで、保護者や利用者が活動の魅力や参加機会を知りやすい広報環境を整えることができた。 また、Facebook、Instagram、ホームページでの発信に加え、こまき新産業振興センターや商工振興課、愛知県スタートアップ振興課との連携により、STATION Aiで未来館の活動を紹介する機会が生まれた。さらに、大学連携や企業連携を通じて、未来館の取り組みが市内にとどまらず、市外の企業・大学・関係機関にも伝わる機会が広がっている。	【評価に対するコメント】 LINEの運用開始により、従来のSNSやホームページに加えて情報を直接届ける手段が拡充されている。また、関係機関との連携や外部での紹介機会の創出により、活動の周知が市内外へ広がっている。前項にあるようにサポーター希望の問い合わせも寄せられており、広報が関わりのきっかけとして機能していることが確認できる。一方で、紙媒体による周知も多くみられることから、デジタル媒体の活用など新たな視点による広報発信を期待する。		
	児童へのかかわり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・児童館の職員は、活動の援助・指導と共に、個々の児童に対して体調や心理状態に応じた適切な対応が必要。 ・失敗やトラブルに対し、自己肯定感を育み、より良い方向へ成長していけるよう適切な関わりができているか。 ・一人で来館したり、悩みや不安を抱える児童へ適切な関わりができているか。	【評価点の理由】 評価項目に対し、新任職員への研修を充実させるとともに、全職員を対象とした研修も定期的に実施している。さらに、外部機関における研修にも適宜職員を派遣し、こども理解や日々の関わり方、対応力の向上に努めた。また、前年度に引き続き、職員向けの部内報「チャレンジ」を定期的に発行し、育児や教育に関する知識や時事的な内容を共有することで、職員間の共通理解を図っている。 令和8年3月には、職員研修「こどもと関わる大人のための包括性教育」を実施した。こども性暴力防止法の概要、こどもの人権課題、包括性教育、思春期のこどもとの関わり、児童館で起こりやすいグレー事例、OKな関わり・NGな関わり等について学び、こどもを権利の主体として捉え、組織全体で防止・対応に取り組む必要性を共有した。 日々の業務においても、問題行動やトラブル等の情報共有を行い、職員間で対応方法や日頃からの留意事項を確認しながら、積極的な関わりと早期の解決を目指している。限られた人員・時間の中でも、職員相互の情報共有や引継ぎを行うことで、こども一人ひとりに応じた関わりと、安心できる居場所としての児童館機能の維持に努めた。	【評価に対するコメント】 職員研修や情報共有の取組が継続的に実施される中で、こども理解や関わり方に関する共通認識の形成が図られ、組織として対応力の維持・向上につながっている点が評価できる。また、日々の共有や引継ぎにより、状況に応じた対応が行われ、こども一人ひとりに寄り添った関わりが実践されている。日常的な関わりに加え、講座等の開催を通じて、こどもの背景や特性を踏まえた関わりが意識され、関わりの幅や深まりが図られている。		